

## 近代漆工史における絵画性の追求——高橋節郎のスグラフィート漆絵を手がかりに——

南 有里子（金沢美術工芸大学 柳宗理記念デザイン研究所）

1933年に東京美術学校工芸科漆工部に入学し、六角紫水、松田権六、そして山崎覚太郎の薫陶を受けた世代の漆芸家である高橋節郎（1914-2007）は、中国由来の「鎗金」を発展させた独自の技法を駆使したパネル作品を第二次世界大戦後の日展や現代工芸美術展に発表したことで知られ、その絵画性が高く評価されてきた。1982年まで東京芸術大学で教鞭を取った後、自身の回顧・新作展として「一鎗金と蒔絵—高橋節郎漆芸展」を1987年に開催した高橋は、同展に際して行われた荒川浩和との対談の中で、当初は彩研出蒔絵を主としていたものの戦後の化学塗料の進展により彩漆の限界を感じ、黒と金、貝、朱にしぼったことがのちの鎗金の仕事につながったと述懐している。さらには、沈金とは道具も彫り方も異なる自分なりの鎗金がイメージの表現に最適であると主張していることから、この80年代までに確立する高橋の鎗金技法の独自性を、自身の追求する「絵画性」の支柱として自覚していたものと推察される。しかし一方で、高橋の技法の独自性の詳細や、それを追求した過程について具体的に論及する研究は見当たらない。

本発表ではこうした問題意識のもとで、これまでほとんど紹介されてこなかった、1957年と1959年に開催された高橋の個展「スグラフィート漆絵展」および佐治正や辻光典らと設立した工芸団体「円心」（1960-1969）の年次展へ高橋が出品した作例に関する調査に基づき、高橋が戦後初期に独自の技法の修練により絵画性を追求した過程とその意義について考察する。

高橋が官展に初めて出品したパネル作品として知られる《漆器花の星座壁装飾》（1949年・第5回日展）は、アルミニウム合金板を素地として、油画のそれに近似した色彩と筆致が彩研出蒔絵によって表現された作品であった。戦後に化学塗料の研究開発が進展する中、1954年頃から高橋は彩漆の使用を控えて黒と金を中心とした表現を試みるが、1959年の個展に際してははまだ自身の作品を「漆絵」と位置づけ、また漆絵が絵画の一ジャンルとして発展することを切望してもいた。しかし二度の個展の成果と「円心」展における鎗金技法のさらなる探求を通じて独自の絵画性が開花し、また1960年代には鑑賞を主とする「工芸美術」を求める機運とも相俟って、円熟期のパネル作品に見られるような黒と金の世界へ収斂したと考えられる。

「スグラフィート漆絵展」および「円心」展への出品作例は、高橋の表現が確立される過渡期として重要な意味を持っており、近代漆工史における絵画性の追求の一例として注目に値する。